

個別最適な学びと協働的な学びを
一体的に充実していくための10のヒント

充実ナビゲーション

JYUJITSU-NAVIGATION

島根県教育センター 浜田教育センター 研究・研修スタッフ R4 研究成果物

「ICTを活用して家庭学習の充実を！」

子どもたちが主体的に学ぶために効果的にICTを活用する。
ICTも活用しながら家庭と学校の学びを往還させ、家庭での学びを充実させる。

“ICTを活用する”とは？

なぜICTを活用することが必要なの？

全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びを実現するためには、学校教育の基盤的なツールとして、**ICTは必要不可欠なもの**だといえます。今、世界中の知識はインターネットを検索すれば容易に収集できる時代で、もはや教科書だけでは子供が獲得する情報は不足してまいります。知りたい・学びたい知の欲求に答えることで、子供の主体的な学びにつながります。

子供たちの可能性を引き出すICT

子供たちがICTを日常的に活用することより、知りたいときにいつでもどこでも学ぶことができ、自らの学習を調整しながら深めていくことができるようになります。やりたいことを追求できる環境ができることで、予想しなかったような形で子供たちの可能性を引き出されることにも着目する必要があります。



どんな役割があるの？

知の欲求にすぐに応えるツールとして

*知りたい！辞書としての役割

インターネットで知りたいときに調べることができ、知りたい欲求に答えます。

*見たい！友だちの意見を見る班活動の役割

ロイロノートやJamBoardなど、学級全体に一人一人の意見が反映でき、友だちの発表した意見だけではない考えも端末を通して「見る・知る」ことができます。他者の意見をつないで深めることも容易になります。

多量の記録・記憶を持ち歩けるツールとして

*まとめる！ファイルとしての役割

データに打ち込んだり、スライドにしてまとめたりなど、自分が分かりやすい形で保存することができます。写真で記録したり、記録媒体としても有効です。

*振りかえる！自学ノートの役割

記録として様々なデータが保存してあれば、家庭で授業を思い描くことができます。持ち帰ることが難しかった立体的なものなど、端末を通して確認できます。

どのように取り入れるの？

授業の学習とつなげる工夫を！

家庭学習を充実させるためには、授業の学習とつながるように支援していくことが大切です。

左のように授業で活用したデータを、家庭学習で使用する場面を考えてみましょう。



*分からないことを振りかえる

ICT端末に保存して置いたデータを活用すれば、その日の授業が振り返りやすい子供もいるはずです。データを基に想起しながら、自分の考えをまとめる、定着を図るための問題を行う、なども可能となります。

*予習や反転学習に活用する

事前に調べる、生活する中で発見したことなどを撮影して授業に向かうなど、ICT端末をうまく活用した宿題なども考えられます。問いをもって授業に望むこともできそうです。



ICTをどこで取り入れるかが鍵！
大切なのはICTを使いこなすこと！



慣れる、つながる活用

スタディーエクススタイル
StuDX Style — 文部科学省HP



家庭学習の留意点

学習指導の基本を身に付けよう
「授業づくりQ&A」
— 浜田教育センター研究・研修スタッフ



個別最適な学びとの関連

目の前の課題に、自分のペースややり方で取り組むことが可能です。例えば一斉授業で学んだ後にやりたいジャンプ課題を選択して取り組む、関連した課題を家庭でも実施するなど考えられます。

「子どもの“学びの足跡”から個別最適な学びへ」

ICT (Studylog) を活用し、子どもの学びの課程や学び方の特徴を見つめ直し、個別最適な学びの実現に生かす。

「Studylog」とは？

Studylog = 学びの記録 (デジタル化)



Studylog (スタディ・ログ) という言葉は直訳すれば「**学びの記録**」ですが、最近では特に**デジタル化**された学びの記録を指す言葉として使われることが多くなっています。

どのような情報を記録する？

学習評価

学習履歴

学習到達度

デジタル化された学びの記録を蓄積・活用する際に、スタディ・ログという言葉が使われています。スタディ・ログには、**学習履歴**や**学習評価**、**学習到達度**などの情報が含まれます。

なぜデータ活用が必要なの？

学校の中で、こんな課題はありませんか？

学習指導では・・・

子供の前学年の学習状況をさかのぼることが難しく、いつ学習につまずいたのかハッキリわからない



生活指導では・・・

不安を抱える子供の学習や生活の様子を関係者間ですばやく共有できない



保護者への情報提供では・・・

保護者懇談会での説明にもっと説得力をもたせたい



エビデンスに基づいた的確な指導・支援

学習指導の充実



つまずきの早期発見や個に応じた学習指導等

生徒指導の充実



問題の早期発見と適切な対応

保護者への情報提供



説得力のある説明

個別最適な学びとの関連

ICTの活用により、学習履歴 (スタディ・ログ) 等を蓄積・分析・利活用することが重要です。このことは、教師の負担を軽減や、児童生徒が見通しを立てたり、新たな学習方法を見出したりする等の効果が期待できます。

どのように取り入れるの？

さまざまな場面でのデータ活用の例

授業

ICTを活用した子供たちの学習活動を見取る



子供の活動をその場で見取り、**授業に反映**することができる。

放課後

授業を振り返り 子供たちの理解度をチェックする



学級内の子供の**データが**一覧化され、効率的に授業の振り返りができる。

学年の担任同士で指導を相談する時の参考とする



具体的な**データを見ながら**相談するので、スムーズに状況共有ができる。

研修

児童生徒や学級の状況をデータで確認する

データを基に**客観的に**取組を振り返ることができる。また、教員間で**課題意識を共有**できる。

具体的な実践事例はこちら

教育の質の向上に向けた
データ連携・活用の取組
《エビデンスに基づいた学校教育の改善に向けた実証事業》



「子どもが**選択** 最適な**学び**」

子どもが自分に**最適な学び**を**自己調整**できるよう、教師は様々な「**学びの選択肢**」を豊かに提供する。

「学びの選択」とは？

得意な**分野・領域**の選択

一人一人の子どもに、「得意とする**分野あるいは領域**」を追求する機会を保障することで、将来の進路選択やキャリア形成の基礎を養っていきます。

また、学習内容についても、**自己の興味・関心や能力**に応じて**選択**できる機会を提供することが、個性を伸ばすことにつながります。



なぜ「学びの選択」が必要？

多様化する子どもの実態

発達障害
の可能性のある子供

特異な才能
のある子供

不登校・不登校傾向
の子供



家庭の文化資本
の違い

家で日本語を話す頻度
の違い

子供たちの**特性**や**関心・意欲**は様々

子どもたちが多様化する中で、教師一人による紙ベースの一斉授業スタイルは限界に…。

どのように取り入れるの？

子どもたちに「**学び方**」を提供する6つの視点

一人一人の子どもが、多様な**選択肢**の中から、自分に**最適な「学習方法、学習時間、教材等」「学習形態、学びの筋道等」**を**自己決定**し、**学びを自己調整**する経験を、積み重ねることが重要です。



得意な**追求の仕方・やり方**の選択

誰と、どこで、何で学習するか等、**追求の仕方・やり方**にも得手・不得手があります。

自分の**得意な学び方**を知り、**学びを調整**しながら、**最適な学び**を実現できるようになることをめざします。

教師には、様々な**教材**や**学習の形態、学びの筋道**や**メディア**を用いた**学び方**の提供が求められます。



そろえる教育 から **伸ばす教育** へ

一人一人が個性を伸ばせるよう、自らに**最適な「学び方」**を**自己調整**する力が求められています。

資質・能力重視の教育課程への転換

教師による一斉授業	主体	子ども 主体 の学び
同一学年で	学年	学年に関係なく
同じ教室で	空間	教室以外 の選択肢
教科ごと	教科	教科等横断・探究
教える	教師	コーディネート
同質・均質な集団	教職員組織	多様な人材・協働体制



Society5.0の実現に向けた教育・人材育成に関する政策パッケージ (2022年6月2日)

令和の日本型教育は、「一人ひとりが多様な幸せ (Well-being) を実現できる社会」を目指すための取り組みであることが分かります。「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」の重要性を理解する上で、p10の「認識すべき教室の中にある多様性・子供目線の重要性」、p23の「子供の特性を重視した学びの『時間』と『空間』の多様化」は、必読です。



個別最適な学びとの関連

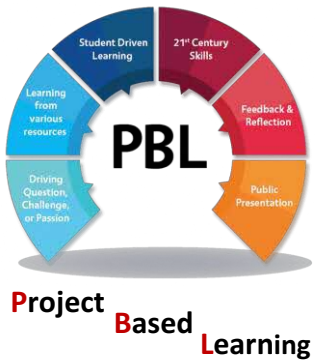
ある子は、基本的な学習内容を理解するために、友達と相談しながら教科書を用いて学習している。ある子は、発展的な課題に、一人でタブレットを用いて挑戦している。1つの授業の中で、一人一人に最適な学びが入り混じって展開される状態を目指します。

「自ら学び、考え行動できる力の育成」

学習者自らが課題を見つけ、さらに自ら解決する能力を高める学びの場（例・PBL）を提供する。

「PBL (Project Based Learning) 」とは？

プロジェクト型学習／課題解決型学習



PBLは「Project Based Learning」の略で、プロジェクト型学習、課題解決型学習とも呼ばれます。知識の暗記等の子供が受動的な学習ではなく、**自ら問題を発見し解決する能力を養うこと**を目的としています。

従来の授業とは違うの？



教員が教壇に立って板書し、子供がそれをノートに写すという従来の授業とは大きく異なり、**子供が自ら課題を見つけ、その課題を解決するまでの過程でさまざまな知識を得ていくという学習方法**です。

なぜPBLが必要な？

「主体的・対話的で深い学び」の実現



PBLが重要視される背景には、文部科学省が進めている「主体的・対話的で深い学び」があります。従来のような受動的な授業や学習では、情報化社会やグローバル化といった社会的変化のスピードに適應するのが難しいのです。**主体的に判断をする力を身に付けて、多様な社会の中で自分を位置づける力を養う必要があります。**

主体性と汎用的能力の育成



子供が主体的・能動的に学ぶことで、**汎用的な能力が育成**されます。このような能力の育成のために、問題解決学習、体験学習、調査学習、グループワークなどの学習の形を取り入れていきます。**PBLはこのような教育方法の1つ**です。

どのように取り入れるの？

PBL (プロジェクト型学習) 進め方の例

①問題・課題を発見し、決定する

最初に課題を決めます。課題は提示される場合もあれば、自分たちで見つけることから始める場合もあります。

②どうすれば解決するのかを考える

課題解決に必要な情報を集め、解決の方策を考えて、グループでディスカッションを行います。ここでは課題解決の道筋を明確にしていきます。

③課題の解決に取り組む

個人またはグループで実際に課題の解決に取り組みます。適宜、課題解決に必要な知識や情報を集め、様々な角度から検証します。

④成果をまとめ、振り返りを行う

最後に自分の考えをレポートやスライド等にまとめ、成果を発表します。また、ルーブリック等を活用しながら自らの学びの振り返りを行います。

PBL型授業モデルの構築

総合的な教師力向上のための
調査研究事業実施報告書
《平成28年度 文部科学省委託事業》



個別最適な学びとの関連

指導の個別化

○子供一人一人の実態に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うこと。

学習の個性化

○子供の興味・関心・キャリア形成の方向性等に応じ、子供一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供すること。

「まず挑戦 すぐに修正・改善 AARサイクル」

見通し・行動・振り返りのサイクルで、学びの自己調整力を高める

AARサイクルって何？

なぜAARが必要なの？

どのように取り入れるの？

修正・改善を繰り返すAARサイクル



ある程度の見通しが立ったら、まずはやってみて（挑戦し）、修正・改善を繰り返し、少しずつ完成に近づけていく課題解決サイクルが求められています。この**見通し**、**行動**、**振り返り**のサイクルを**AARサイクル**といいます。

Anticipation（見通し）
Action（行動）
Reflection（振り返り）

変化の激しい予測困難な時代だから

1、2年先でさえも予測困難で先行き不透明な激動の時代（**VUCAの時代**）を迎えています。その中でPDCAサイクルを回そうとすると、計画の前提となる社会情勢が変化し、計画の修正せざるを得ない状況が繰り返されてしまいます。激動の社会変化に対応できるスピード感は、AARサイクルの強みです。



どの教科でも 気軽に実現 AAR！

AARの視点で日常や授業を振り返ると、意外と行っていることにも気づかされます。どの教科でも、どの場面（導入・展開・終末）でも、気軽に取り入れられるのがAARのよさです。

なすことによって学ぶという点で、特別活動（学級活動、生徒会活動、学校行事）とも親和性が高いです。

子どもたちがAARを自覚し、意識的に取り組むことが大切です。



PDCAサイクルとは違うの？

PDCAサイクルは、組織や一定のプロセスなどを対象として行うものです。何らかの前提に基づいて中期的な計画を立て、その通りに実行し、評価と改善を行います。サイクルの途中で柔軟に計画を修正することが難しく、側面があります。



Plan（計画）
Do（実行）
Check（評価）
Action（改善）

答えがないからこそ柔軟に修正・改善を！

VUCAの時代の今、私たち一人一人、そして社会全体が、答えのない問題にどう立ち向かうかが問われています。

答えがない課題に立ち向かうには、まずは予測を立て、試行錯誤しながら、目標に向かって柔軟に修正・改善を繰り返すことが重要です。

このようなAARサイクルの思考や体験を繰り返すことで、**これからの時代に求められる資質・能力**、自分の学びをコントロールする**自己調整力**を高めることができます。

教師もAAR とりあえず第一歩を！

教師の姿は子どもにとって何よりの成長モデルです。「個別最適な学び…」も、とりあえず第一歩を踏み出すことが大切です。

修正・改善があることを前提として、まずは挑戦うまく行かなくて当たり前。教師も子どもも**失敗が日常！失敗を前向きに捉える！**

AARサイクルで「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」の実現に向けた授業改善と一緒に取り組み、子どもの可能性を伸ばしていきましょう。



AARサイクルの出所

OECDラーニング・コンパス
（学びの羅針盤）2030
— OECD（経済協力開発機構）



AARをもっと詳しく

VUCA時代を生き抜く
マインドセットは「デバッグ主義」
— 東京大学公共政策大学院教授 鈴木 寛



個別最適な学びとの関連

課題解決のために、インターネットや書籍で情報を探しても見つけられないことがあります。その時に、情報を持っていそうな人を予測して連絡を取り、実際に会って話をしたり新たな情報源を探したりと試行錯誤しながら、解決の糸口を探る姿。

「資質・能力を育成するためにねらいを明確にした授業を！」

目標？ ねらい？ めあて？

ねらいを明確にした授業とは？

ねらいに沿った授業展開のために

教育用語を確かめましょう

目標：児童生徒に身に付けさせたい力
(資質・能力)

ねらい：目標に迫るために行う学習活動等の
教師の意図

めあて：「目標」「ねらい」を達成するための
学習課題を児童生徒向けの言葉で
示したもの。

指導のねらいがはっきりしていることは、
よい授業で求められる条件の一つ！



教師の指示があるから
〇〇するのではなく、
「何のために〇〇
するのか」子ども
たちが分かっている
ことが大切。

指導のねらいがはっきりしている

授業を行う上で、「何のために学ぶのか」「学ぶことでどんな力が付くのか」ということを子どもたちと共有しておくことが大切です。授業を組み立てていく際に、『指導方法』に意識が向いてしまい、大切な『指導目標』や『指導内容』が疎かになってしまうことがあります。まず、「伸ばしたい資質・能力は何か」という指導目標を設定し、目標を達成するためにはどのような教材を使って、どのような内容を指導すればよいのかを考えます。そして、どのような方法で指導していくのかということを計画していくのです。

ねらいが明確だからこそ、自分で、(自分たちで)
学び進めることができる！

個別最適な学びは、自分のやり方で、自分のペースで学習を進めることができます。これは、児童生徒自身が自らの特徴やどのように学習を進めることが効果的であるかを学んでいくことにつながります。このような学びが成立するためにも、児童生徒の高めたい資質・能力やねらいを学習者と共有しておくことが大切です。どこに向かっていくのか、ゴールがはっきりしているからこそ、見通しをもってそれぞれが学習を進めていくことができるのです。

効果的な発問を練る

発問とは、授業中に教師が行う意図的な問いかけ(指導言)のことをいい、授業構成の核となる非常に重要な指導技術です。十分な教材研究や板書計画に合わせて、学級の実態に応じた発問を考えることが、子どものより深い思考を促し、自分なりの考えをつくり出す手立てとなります。

【閉じた発問と開いた発問】

閉じた発問とは、YesかNoで答えられるものや答えが1つしかないものです。閉じた発問は、開いた発問の前段階として用いると有効で、授業にリズムやテンポを生み出すことができます。しかし、閉じた発問だけでは、子どもたちの思考力を刺激するものにはならず、授業が単調なものになってしまいます。

EX:①草食動物の目は、顔のどこについていますか。
②草食動物の目が顔の横についているのは、なぜだと思えますか。

【効果的な発問づくりのポイント】

- ◇ねらいに即して発問を使い分ける。
- ◇ねらいを明確にして、応答を予測する。
- ◇子どもの実態に合わせる。
- ◇子どもが自ら疑問をもつよう教材や教具を工夫する。
- ◇発問を吟味する。
- ◇学習基盤の大切さ



参考資料

学習指導の基本を身に付けよう授業づくりQ&A～『よい授業』を目指して～
平成23年3月 島根県教育センター 浜田教育センター

詳しく知りたい方は



個別最適な学びとの関連

「何のために学ぶのか」「学ぶことでどんな力が付くのか」ねらいをはっきりさせることで、子どもたちの学ぶ意欲につながります。また、児童が自分の「学び」がねらいとずれてはいないか立ち返る指針となり、学びの調整につながります。

「これからの教師の役割」

教師がファシリテーターとなり、それぞれの子どもたちの学びをつないで創る授業を展開する。

これからの教師の役割って何？

求められる、これからの教師の姿

全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現のために、教職員には次の3点が求められています。

- 教師が技術の発達や新たなニーズなど学校教育を取り巻く環境の変化を前向きに受け止め、教職生涯を通じて探究心を持ちつつ自律的かつ継続的に新しい知識・技能を**学び続ける**こと。
- 子ども一人一人の**学びを最大限に引き出す**教師としての役割を果たしていること
- 子どもの主体的な**学びを支援する伴走者**としての能力も備えていること。

「個別最適な学び」を創る主体は子ども！

「個別最適な学び」を創る主体は「子ども」です。子ども一人一人の目線で授業が展開されるよう、子どもの声をつなぎ、教師は授業を創っていきます。

そのためには一方的な知識を注入する授業ではなく、子どもの学びを教師自身がファシリテートし、**子どもの声をつないで創る授業展開**が求められます。

何から始めればいいのか？

まずは、子どもの学び方の得意を見いだす

「個に応じた指導」のためには、一人一人の**子どもがどのように学ぶことが最適なのかを見いだす**ことが望まれます。その子の得意が活かせる学習カリキュラムを考えてみましょう。デジタルネイティブ（子どものころからパソコンなどのデジタル機器やインターネットがある環境の中で育ってきた世代）の子どもたちには、これまでのような「ノートに写す」「ノートにまとめる」だけではなく、別の方法が学びを獲得しやすいこともあります。



どのように子どもと向き合うの？

“はげましとフォロー” 子どもたちに寄り添う存在として

* **子どもに学びの自覚を促す“問い返し”**
自分が気がついたことや分かったことに対して、省察できるようにすること。そのために子どもに常に問い返し、学びを自覚できるようにしていくことも大切です。



* **どうファシリテートするか、いかに伴走するか**
個別最適な学びの場面と協働的な学びの場面をどうつなげるのか、学習活動全体を見渡せること。**子どもの側で、子どもの視座に立ち、学びの伴走者**として自覚を促すのか、見通しを持てることも必要です。

教育課程の2割だけ変えてみる

「個別最適な学び」と「協働的な学び」を**一体的に充実させるために教育課程を見直し**、授業や単元や題材などの学習のまとまりの中でどれだけ反映させることで**主体的、対話的で深い学びにつなげることができるか見通しを持って授業を創る**ことも必要です。

研究指定校では、教育課程の2割だけ変えて実施することで、子どもの学びが変わったとしています。

だから、私たちは学び続ける！

私たちは、求められる知識・技能が変わっていくことを意識して、継続的に新しい知識・技能を学び続けていくことが必要です。子ども一人一人の学びを最大限に引き出す質の高い指導が可能となることに加え、教師自身も**一層やりがいを感じ、教職生涯がより充実したものにしていく**ことです。「先生」が**魅力ある職業であることを子どもたちに魅せていく**ことも大切です。



もっと詳しく！

これからの教師の姿

- 文部科学省答申
- 「みなさんからの10の質問にお答えします！」文部科学省HP



天童中部
小学校から学ぶ

一山形県天童市立
天童中部小学校HP



個別最適な学びとの関連

最終的には先生がいなくて子供同士で学び合い高め合うことを目指します。その姿を目指して、子供たちに関わる場面等を考えてみましょう。子供と関わる中で「この子の奥底にはまだ何かありそうだな」と思う部分に働きかけていくことが大切です。

「一人一人の可能性を伸ばす多様な学び」

児童生徒の多様な学びのニーズに対応し、創意工夫を生かした学びが笑顔をつくる

多様な学びって何？

何を学ぶから、学び方を学ぶへのシフト



その人に合った学びや学び方を尊重して、学びを促進していくことです。

学びの「機会」「方法」を確保し「いつ」「どこで」「誰と」

「何を」「どのように」学ぶのかを、学習者自身が選ぶ学びのことです。

学び方を学ぶって？



これまでは、**学んで得た知識や技能をたくさん蓄えることが学力**と考えられていました。つまり、**何を学んだかが大切**とされていました。



これから求められる学力は、「**学ぶ力そのもの**」、つまり**学び方をどれだけ学んだかが大切**になってきます。

なぜ多様な学びが必要なの？

求められるのは「学ぶ力そのもの」だから

「何を学んでおけばよいのか予測が難しい」時代を迎えています。したがって、これからの時代に求められる学力は「学ぶ力そのもの」になります。



予測困難な時代だからこそ、生涯にわたって学び続けるということ自体の力をつけられるようにしていくことが求められています。

自分に合った学び方を自分で選択！

予測困難な時代の今、私たち一人一人、そして社会全体が、答えのない問題にどう立ち向かうかが問われています。

立ち向かうために手がかりとなるのが、**人の能力の多様性**です。人にはそれぞれ得意不得意があります。**自分の得意（強味）生かした学び**を選択し、学ぶことで、答えを見い出せる力を身につけることができます。

そのために、**学びの機会と学びの方法を尊重**することが大切です。

どのように取り入れるの？

まず子ども一人一人を見る

子ども一人一人の学びを大切にするためには、それぞれの個性を理解することが大切です。

そして、「子どもたち一人一人がどう学べば「学ぶ力がつくのか」を教師が考えながら授業づくりを行うこと、それ自体が多様な学びへの一歩となります。



教師がまず多様な学びの機会を提供

教師は子どもと関わりながら、子どもの可能性（得意不得意）を感じています。その関わりに、「個別最適な学び…」のヒントがあります。

人と話をすることが得意な子ども、ICT活用が効果的な子どもなど、日々の関わりで教師が感じた子ども一人一人の能力を活かす学び方を実践してはどうでしょうか。

多様な学びで「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」の実現に向けた授業改善と一緒に取り組み、子どもの可能性を伸ばしていきましょう。

個別最適な学びとの関連

子どもが自分に最適な学習内容や学習方法を自己決定する際、自分の得意なこと、不得意なことなど自分に合わせて学び方を選択し、実践していきながら、学びを自己調整する必要があります。その際に、多様な学びの環境が重要な役割を果たします。



多様な学びと個別最適な学びと協働的な学び
(文部科学省)



多様な学びをもっと詳しく
～ICT活用編～
(文部科学省 StudyStyle)



「STEAM教育等の教科横断的な学習の推進」

教科横断的な学習の推進によって、現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力を育成する

STEAM教育とは？

教科横断的な教育のこと！

STEAMって何？

Science 科学
Technology 技術
Engineering 工学
Art アート
Mathematics 数学



STEAM教育とは科学・技術・工学・数学からなる「STEM」にアートを加えた5つの領域を対象にしたもので、知ること（探究）とつくること（創造）を結びつけ、各教科での学習を実社会での課題解決に活かしていくための教科横断的な教育のことです。

教科横断的な教育とは何か？

それぞれの教科がバラバラに授業をしているだけでは、これからの時代に必要な能力が育たないので、各教科が足並みを揃えて授業をしていきましょう。

各教科が全体的・総合的に子どもの能力を育てていくためには、まずは、それぞれの教科がどのような力を育むのか、**教科の本質をしっかり把握していなければなりません。**それぞれの教科が育む力をしっかり掴んでいて、各教科の中で子どもの力を伸ばしていけば、「教科等横断的な視点」の基本が実現していると言えるでしょう。

なぜ教科横断的な教育を推進するの？

社会の激しい変化により多様な課題が生じているから

AI（人工知能）やIoT（Internet of things）などの急速な技術の進展により社会が激しく変化し、多様な課題が生じている今日においては、これまでの**文系・理系といった枠にとられず、各教科等の学びを基盤としつつ、様々な情報を活用しながらそれを統合し、課題の発見・解決や社会的な価値の創造に結びつけていく資質・能力の育成が求められます。**

実社会で生きる資質・能力の育成

学習指導要領においては、学習の基盤となる資質・能力（言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等）や、**現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力を育成するため、教科等横断的な視点から教育課程の編成を図ることとされています。**

理学、工学、芸術、人文・社会科学等を横断した学際的なアプローチで**実社会の問題を発見し解決策を考えることを通じた主体的・対話的で深い学びの実現**をめざします。

推進していくためにどうすればいいの？

目標の設定と目標達成のための授業計画

- ①学校は子どもたちに身に付けてほしい（育成すべき）資質・能力を明確にし、目標を立てることが大切です！
- ②目標を実現するために教科間の連携を図るには、**教員が教科ごとの役割を考えながら、教える順序を工夫して授業計画を立てる必要があります。**

※くれぐれも各教科の「内容」だけでなく、育成したい「資質・能力」でつなぐようにしましょう。



カリキュラム・マネジメントを！

カリキュラム・マネジメントは全ての教職員の参加によって教育課程の編成・実施・診断・評価・改善を通して、学校の特色を創りあげていく営みです。

⇒授業から、学級経営から、校務分掌から、教育課程へのベクトルを生み出す。

⇒教職員全員の参加による、学校の特色づくり
⇒学校教育目標、**育成を目指す資質・能力**、学校のグランドデザイン等をとらえ、取組の方向性を共有する。

参考資料

『STEAM教育等の教科等横断的な学習の推進について』

詳しく知りたい方はこちら！



文部科学省

個別最適な学びとの関連

実社会の中から、自分でテーマ（課題）を設定し探究的な学習を進めていくことや、各教科等の学びを基盤としつつ様々な情報を活用しながらそれを統合し、課題の発見・解決や社会的な価値の創造に結びつけていく資質・能力の育成をすることが個別最適な学習と関連しています。

「多様な学びを広げる宝探しに出かけよう！」

宝（ひと・もの・こと）との連携が学びの協働体制を生み出す

連携が学びの協働体制を生み出すとは？

なぜ連携が必要なの？

どのように連携していけば？

「社会に開かれた教育課程」がポイント

少子化高齢化や地域とのつながりの減少などを背景に、学校が抱える課題が複雑化・多様化しています。そのような中、学校だけではなく、社会全体で子どもたちの育ちを支えることが求められています。「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」という理念を学校と社会が共有し、連携・協働しながら、子どもたちに新しい時代に求められている資質・能力を育んでいくことが、「社会に開かれた教育課程」に期待されています。

社会全体で子どもの育ちを支えるため

社会とのつながりの中で子どもたちが学ぶことで、子どもたちは、自分の力で人生や社会をよりよくできるという実感をもつことができます。



このことは、変化の激しい社会において子どもたちが困難を乗り越える未来への希望や力となり、そのために社会と連携・協働の充実がカギとなります。

まずは地域に出かけてみよう！

地域の公民館、まちづくりセンターには、地域の宝（人材、もの、こと）に関する情報がたくさんあります。地域にどんな宝があるのかをまず知るころから、連携・協働が始まっていくかもしれません。



まず、地域に出かけてみるという気持ちで動き出してみてもいいでしょうか。



「社会に開かれた教育課程」のメリット



子どもたちは様々な経験を通して、資質・能力を獲得していきます。良質の教育実践を提供していくために、学校内、外部資源と連携・協働することを前提とした教育課程＝社会に開かれた教育課程を作ります。

このような取組が、外部資源と連携・協働するからこそ実現できる成果につながってきます。

お互いの目標を話し合うことが大切

「こんな子どもを育てたい」など、お互いの目標を確認することで、**前向きな姿勢**で取り組むことができます。

それぞれが襟を開き、子どもの状況や課題について話し合った上で、教育活動に取り組んでいくこと、これが**連携・協働**につながり、**多様な学び**につながってきます。



連携・協働からの計画作成がポイント

これまで、学校や教師の現状から「できそうな取り組み」を作成していたかもしれませんが、今後は、目標となる「資質・能力」を設定し、地域資源と連携・協働を想定しながらこれまでの教育計画を見直したり、改善したりすることで個別最適な学び・協働的な学びにつながるのではないのでしょうか。



参考資料

学習指導の基本を身に付けよう授業づくりQ&A～『よい授業』を目指して～
平成23年3月 島根県教育センター浜田教育センター

詳しく知りたい方は



個別最適な学びとの関連

「何のために学ぶのか」「学ぶことでどんな力が付くのか」ねらいをはっきりさせることで、子どもたちの学ぶ意欲につながります。また、児童が自分の「学び」がねらいとずれてはいないか立ち返る指針となり、学びの調整につながります。